

## 修 士 論 文 の 和 文 要 旨

大学院 情報システム学研究科      博士前期課程      情報システム運用学専攻		
氏	名    所   正和	学籍番号   0552018
論 文 題 目	保全性に着目した品質保証体系と情報の共有化についての一考察	
<p><b>要 旨</b></p> <p>工業製品の高度化、複雑化、多様化が進むにつれて、その製品に使用する材料、部品の全てを自工場で生産することは、技術的・経済的にもさらに企業規模の上からも困難になってきている。また、適正な品質（Quality, 以下Qと呼ぶ）、コスト（Cost, 以下Cと呼ぶ）、納期（Delivery, 以下Dと呼ぶ）で製品・サービスを提供していくためには外部購入している材料・部品・サービスについてもQ・C・Dが適正なレベルに保たれてなくてはならない。最終的な製品・サービスの中にそのQ・C・Dがあるわけで、それらを含めて製品・サービスが顧客に評価される。</p> <p>しかしながら、製品・サービスを提供する品質保証体系が、大規模・複雑化していくにつれ、企画・設計・製造・保全等の各ステップでの品質情報が正しく伝達されず、管理面の不備等が一因で生じる事故が発生しているのも事実である。</p> <p>本研究では、前述のような管理面の不備が一因で生じる事故を「使用の信頼性」の低下と考え、使用の信頼性を高める要素を抽出し、その中でも保全対象の形態を体系化すること（品質保証の仕組み）及び保全情報の流れ・質の吟味について着目し研究を進めることとした。</p> <p>研究の流れとして、保全を取巻く周辺要素、保全の対象システム毎の品質保証体系の現状把握、保全情報の抽出を行い、ある企業に対してアンケート・ヒアリングを行い、保全部門とのあるべき姿と現状の姿の差を確認して、各部門の認識のずれ、共有化をはかる一つの指標とする。また、過去の事故事例を調査し、そこから学ぶべきことの考察を行った。</p> <p>本研究の結果</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 保全を中心とした品質保証体系の現状を、事例をあげて考察した。</li> <li>2. 保全に関わる情報を体系的に抽出し、保全・各関連部門の保全情報の認識のずれを抽出する手法を提案した。また、本手法を用いて、ある企業にアンケートを行い、実証を行った。</li> <li>3. 過去の事故事例を調査・解析を行い、保全情報という観点で必要な情報の抽出を行った。</li> </ol> <p>以上のことから、対象とするシステムによって、各ステップにおける活動の担当部門は社内のみにとどまらず、社外を含めたグローバル化がおきており、様々な品質保証体系が存在し、組織を超えた保全情報の共有化は益々重要性が高まってきていることが判った。また、保全情報の活用と重点管理を行う為にも、本研究で提案した手法により、各ステップの認識のずれを共有し、是正を行うための一つの指標を示すことができた。今後の課題として提案した手法での解析事例を重ねていき、より一般化していく必要がある。</p>		